
幽霊少女と向こう側。

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊少女と向こう側。

【Nコード】

N5024R

【作者名】

幻影

【あらすじ】

幼い頃私が見た不可思議なものについて、答えを述べたのは少女だった。突発的に思い立った、よくわからない話。ホラー……でいいのか？

世界には、『向こう側』がある。

そんなことを言えば確実に精神病院にでも連れて行かれるのだから、私はそのことを誰にも言ったことはない。

父は厳格で厳しい人だった。幼い頃から大きな声で怒鳴られていたし、手を出されることも稀ではなかった。逆に母は気が弱く大人しい、従順な人だった。所詮いいところのお嬢様、である。

そんな両親を持つ次男であった私は、次男であるがゆえに期待も束縛も何もされなかった。その代わり長男である兄はかなり厳しい教育を受けていた。

いい意味でも悪い意味でも他人の関心は全て兄に向いていた私は、幼い頃から一人だった。けれどそれは当たり前のことだったので、寂しいわけではなく、ただ単に一人だったただけだ。

ある日、広い庭にで一人遊んでいた時のことだ。

私が、『向こう側』に気が付いたのは。

何をしていたのかは覚えていない。ただ私は庭にいて、ふとした拍子に小さな私にしては大きかった池に落ちてしまったのだ。

それはそれは盛大に、水柱が立つほどに大きく落ちた。当時泳げなかった私はもがき、そして感じた。

何かが、私の足を掴む感触を。

それは、例えるなら、そう。人の肌の下に軟らかい何かを詰めたような、そんな異様な感触。表面は人の肌のようにだった。ただその中身は、決して肉などではなかった。

まるで、人の皮を被ったバケモノ。

当時の私はそれが恐ろしくて堪らず、母の下で泣き叫んだ。意味不明なことを口走って母を困らせたことはよく覚えている。

それからというものの、何かしらおかしいことがよく起こるようになった。

あれほど決定的なものではなかった。それはふと振り返った瞬間に視界の端に黒い何かの影が見えたりとか、学校からの帰り道に誰かの視線を感じるだとか、所詮気のせいで済ませられるものだ。

だが、小さな頃から今まで——こうして教師になった今でも——そういったことを体験してきた私は、曖昧な、けれど妙にはつきりとした確信を持っていたのだ。

世界には誰も知らない『向こう側』があって、小さな呼び水でそれはふと『こちら側』に現れるのだ、と——

それは幼さゆえの発想であつたが、それゆえに信じ込んでいた。それ以外に考えられなかった、といった方が正しいかもしれない。ともかく、小さい頃からずっとそう思っていた。

そしてそのことに、大人になった今頃答えを教えられるとは思っていなかった。

「——先生、視えるんですか？」

言われた瞬間、何のことだかわからなかった。

声の主は女子生徒で、真面目な、言い方を変えれば何の特徴もない、名前もすぐには出てこないような生徒だった。

きよとん、とその女子生徒を見ていると、不意に呟く。

「ああ……、違うんだ。気付いてるんだ」

少しだけがっかりした様子でその女子生徒は言った。

何が何だかわからない私に、女子生徒は続ける。

「今さっき、校庭を見ましたよね。その時、何か視えませんでしたか？」

ぎよつ、として息を呑んだ。

確かに先ほど、私は校庭を見ていた。そしてその時、視界の隅に黒い影が見えたのだ。

まるで人の腕のような形の、影を。

「君は……あれが何か、『向こう側』を知っているのかい？」

「……私は、視えるだけです。それに、私が知っていることは多分先生とたいして変わりません。『在る』ことは識しっています。それ

だけです」

淡々と並べられる言葉。そして、彼女の言うことは正しいのだろう。

あれを人が理解解明なんて、できるはずがないのだから。

何故自分が生きているか、という問いに近いのではないのだろうか。ただそこに在るものに、何故それが在るのかどうかなど問うのはまったくの愚問である。

答えなど、ないのだから。

もしくは、人それぞれに答えがあるのだから。

「先生は『向こう側』と呼んでいます、私は『彼岸』と呼びます。視えても触れない、遠い向こう岸です」

なるほど、と思う。

確かにあれを私は知っているが、決して自分からは触れない。

「——沙弥^{やみ}、帰ろう?」

不意に遠くから声がした。それは女子生徒に向けられたものであり、彼女はそれに応える。

「うん。じゃあ、先生さようなら」

「あ、ああ」

ふらり、とそのままいなくなってしまった。

そして、あの女子生徒の名は何だったかと考え、思い出す。

満足した私は、仕事に戻った。

「どうしたの、沙弥」

学校からの帰り道、先ほど声を掛けた少年は少女——沙弥に問う。

彼自身あまり意味がないことは知っているのだが、それでも気になった。

彼女は『幽霊』なのだから。

「……別に、何でもないよ。気になっただけ」

沙弥は死んでいるわけではない。けれど彼女は『幽霊』なのだ。心は遠い彼岸にあり、現^{うつ}を見ていない。

それは、精神の意味においては「死んでいる」と変わりなかった。

「……そう」

自分の声は届かないのだろうな、と大きく息を吐いた。白く染まった空気は、すぐに掻き消える。

「寒くなってきたね」

「うん」

いつか、自分を「見て」くれるかな、と。淡い期待を抱いた。

（後書き）

……何なんだろう、これは。

気が付いたら出来ていた作品というのもおこがましい散文。
でも何だか満足したので。

そして、題名と内容が一致していない件について。

続きっぽいものを書くかもしれません。

読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5024r/>

幽霊少女と向こう側。

2011年5月16日12時34分発行